先週の土曜日、十二月二日は、ウィリアムズ主教の亡くなられた日。もう少し詳しく言うと、一九一〇年十二月二日の夜中の三時に八十一歳で亡くなりました。日本の元号で言うと、明治時代の終わり頃の事です。立教学院では毎年十二月二日にウィリアムズ主教記念礼拝を行っています。今年度は二日が土曜日だったために、一日の金曜日に記念礼拝が行われました。

ウィリアムズ主教には色々な逸話（興味深い話）が残されています。

ウィリアムズ主教は、質素倹約に努めておられ、古着屋さんで買い求めた服や式服を、ボロボロになるまで着ておられました。

ある時、昔なじみのアメリカ船の船長が、見るに見かねて「失礼だが先生、あなたの服はだいぶ古くなっているから、裏返して着たらいかがですか。」と言いました。すると主教はほほ笑みながら、「そう、君の言われるようにいったん裏返したのだけれど、それもひどくなったので、また裏返しにして着ているのですよ。」と、お応えになったのだとか。この話、聞いたことがある人もいるでしょう。

また、ある夫人が、主教のあまりにも古びたコートを見て、「主教様、失礼ですが、コートの生地を裏返されてはいかがですか。」と言うと、主教は笑いながら「裏返して八年たちました。」とおっしゃったというような話も伝わっています。

ウィリアムズ主教の給料は、米国聖公会から支給されていて、当時の日本人聖職者の七倍ほどの給料を得ていたので、決してお金がなかったという訳ではありませんでした。

伝道のために各地を回る際には、バターをつけただけのパンをいくつか新聞紙に包んで持ち運び、パンを食べた後、その新聞紙のしわを丁寧に伸ばして持ち帰り、三～四度使うのが常であったようです。

ウィリアムズ主教は目立つことが大嫌い。五十歳になった時点ですでに遺書を書き、書簡、説教、説教のメモはみな焼却するように書き残し、主教自らそれを実行しました。

主教の業績を後世に残すために「伝記」を書かせてほしいという要請にも断固応じず、後々ご自分の伝記を書くことも禁じていたようです。ですから、ウィリアムズ主教の伝記を書こうにも、正確な資料が残されていないので書きようもないのです。

家のない貧しい人にお金を渡す時も、周りを見回し、誰もいないようなときにサッと手渡していたようです。貧しい人や病気の人を見舞う際には、その人に知られぬようそっと物の陰や布団の下にお金を隠し置き、人目の多い場合は、周りの人が気付かぬように、握手の際にそっと紙幣を手渡しました。

ある時、米国に留学する人がいて、その人を見送り、お別れの握手をする際、「餞別」として紙幣を渡されたようです。ところがどういう間違いか、それが新聞紙片だったようです。きっと、お弁当のパンを包むときに使っていたあの新聞紙だったのかもしれません。

新聞紙をもらった人は、どうして新聞紙をくださったのか分からないけれど、有難いことだと友人に語ったのだそうです。それを聞いた友人が、主教に「〇〇さんに餞別を渡されましたでしょう？」と言うと、主教は最初、知らぬ顔をしておられたようです。「実はかくかくしかじか」と友人が語ると、主教は驚いてポケットを探ると紙幣が。右と左のポケットを間違えて、新聞紙片を渡したことに気がついた主教は早速手紙を書いて、お詫びをし、送金の手続きをしたのだそうです。

聖書の道を伝えることのみに誠心誠意励み、決して己を伝えることをなさらなかったウィリアムズ主教。「道を伝えて己を伝えず」。

ぼくたちは、ウィリアムズ主教のおつくりになった学校の一員です。学校や登下校中「悪い己を伝えて道を伝えず」的な行為をしている人はいないでしょうね。もうすぐクリスマスを迎えます。期末のテストに追われて大変な時期でしょうが、体調管理をしっかりして、ラストスパートをお願いします。

（立教小学校校長　田代　正行）